

説 教

聖日礼拝 北浜チャーチ
黒田 禎一郎

2018年7月22日（日）

主 題：「知恵の先にある喜び」

—主のご臨在—

テキスト：ヤコブの手紙1章5－8節

はじめに

- ・ 前回、私は試練にあるとき、それは決して無意味ではないとお話ししました。試練は私たちの中に忍耐を生じさせ、霊的に成長させるためであることを学びました。
- ・ 著者ヤコブは、試練につづいて「知恵」について語りました。文脈を読むならば、ヤコブは、先ず試練ということについて懇々と語りました。そして、ここで突然「知恵」という言葉が出てきました。しかし、12節でまた「試練」についての話しに戻っています。
- ・ では、なぜ突然「知恵」という言葉が出てきたのでしょうか……。それは、ヤコブは試練の中にある人々に対して、「知恵」によって試練を乗り越えることができるからこそ、このように助言したからです。つまり、私たちが試練に会っている時は、ここで言われる「知恵」というものが必要であるということです。そこで、この「知恵」とはいったいどういうものかを考えてみます。
- ・ はじめに、少し整理してみます。知恵には2種類あります。

1) 世間で言う一般的な「知恵」

私たちが生まれながら持っている知恵、あるいは、いろいろな人生体験、社会の中で身に着けていく知恵のことです。事を解決するために、善となる知恵のことです。悪知恵は困りますが、善となる知恵は幸いです。

2) 上からの「知恵」

これは聖霊によって与えられる「上からの知恵」のことです。単なる洞察力ではなく、日々の生活で義なる行為（行い）をするために必要なもので、上（神）から与えられるものです。そのような知恵を持っているなら、試練に勝利することができると、ヤコブは言いました。3章には次のように書かれています。

3:13 あなたがたのうちで、知恵のある、賢い人はだれでしょうか。その人は、その知恵にふさわしい柔和な行ないを、良い生き方によって示しなさい。

3:14 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。

3:15 そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。

3:16 ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ないがある

からです。

3:17 しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。

3:18 義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。

- ・ 私たちは今日、試練に出会っても勝利できる「上からの知恵」について学びたいと思います。2点

大切なポイント

1. 「上からの知恵」を得なさい

1:5 あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。

1) 神が与えてくださる「上からの知恵」

- ・ 5節には3つの特徴が書かれています。

「だれにでも」、「惜しげなく」、「とがめることなく」です。

① 「だれにでも」

神が与えてくださる「上からの知恵」は、神の義を求める人に与えられるものです。感謝すべきことに、「上からの知恵」は信仰によって、「だれにでも」与えられるものです。

② 「惜しげなく」

神は出し惜しみされないお方です。ですから、信仰によって求める人に、「おしげなく」与えてくださいます。

③ 「とがめることなく」

これはどういう意味かと言え、**「私たちの欠点を探さない」**ということです。たとえば、子どもに勉強を教えたりする時（つまり知恵を与えようとする時）、子どもをとがめることがありますね。「どうしてわからないの?」「どうしてできないの?」等と、つい言ってしまいます。

- ・ 親は、子どもが知恵を持つことを願い、それを与えようとしているはずなのに、親はとがめながら与えようとしているのです。「**とがめることなく**」というのは、神はそういうことをなさらないということです。神は「お前はこんなことが分からないのか」、「こんなことができないのか」と言って、「知恵」を与える方ではありません。
- ・ つまり上から目線で、「だめだな」と見下しながら「知恵」を与える方ではないということです。私たちはたくさんの欠点、問題をもっていますが、神はそういうことを問題にしなから、「知恵」を与える方ではないということです。なんとという幸いではありませんか。
- ・ 人間同士は絶えずとがめ合い、お互いの不満をぶつけ合っています。そういう中だけに生きてると、私たちは本当に疲れて、やりきれなくなってしまう。しかし、神を信じる人には、「だれにでも」、「おしげなく」、そして「とがめることなく」、神が「上か

らの知恵」を与えてくださるのです。本当にすばらしいことですね。

- ・それは、次にどんな条件で神は「上からの知恵」を与えてくださるのでしょうか。

2) 知恵が与えられる条件

- ・皆さん。「上からの知恵」をいただくのには、条件があることを知っておられますか。どんな条件でしょうか？ ⇒「知恵」が欠けているという自覚です。
5節に「**あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら**」、とあります。
- ・つまり「**上からの知恵**」に欠けているという自覚を持つことが、この知恵を与えていただく**第一の条件**です。以外と、頭のいい人、よく気がつく人の方が、物事を立派にやっている人ほど、自分がそういうものに欠けているということに気づきにくいかも知れませんね。自分に自信があるからです。
- ・皆さん！ 試練はこういう「上からの知恵」でなければ、乗り越えられないことがあります。どんなに生まれつき頭のいい人でも、人生経験が豊かな人であっても、人間的な知恵によってでは、乗り越えられないことに、突き当たることはあります。
- ・パウロは次のように言いました。**2コリント人への手紙**
1:12 私たちがこの世の中で、特にあなたがたに対して、聖さと神から来る誠実さとをもって、人間的な知恵によらず、神の恵みによって行動していることは、私たちの良心のあかしするところであって、これこそ私たちの誇りです。
- ・パウロはコリント教会の人たちから、いろいろなことを言われました。そして、大変つらい立場に立たされたことがありました。そればかりではありません。伝道中、さまざまな迫害を受け、時には死を覚悟するような大きな試練に遭いました。彼は大変優れた能力を持っていた人でしたが、そういう人間の知恵では、そうした問題に一つ一つ対処してゆくことができないことを経験しました。
- ・いかがでしょうか。私たちはパウロほどではありませんが、家庭の中で、職場で、学校で、あるいは自分の生活の場で、とても難しい立場に置かれたり、追い詰められる時があるのではないのでしょうか。それは信仰の試練であるかも知れません。そういう時に、私たちどういう態度を取るのでしょうか。どういうことを言うのでしょうか。私たちは試練の中で、自分の信仰が試されるのです。
- ・聖書は「上からの知恵」を得なさいと勧めています。では、どうすれば、その「上からの知恵」を得ることができるのでしょうか。

2. 信仰によって祈りなさい

1) 疑わない信仰

- ・「上からの知恵」をいただいた者は、どう生きるべきでしょうか・・・。
神から知恵をいただいた者は、私たちの態度や言葉がコントロールされるものです。困難に際して、純真、平和、寛容、温順、そうした態度で困難に対処してゆくことができるようになります。
- ・この「上からの知恵」をいただくために、そこで一つ大切なことがあります。

それは少しも疑わないことです。

1:6 ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。

1:7 そういう人は、主から何かをいただけると思っはなりません。

- 疑うことは、左右前後に揺れることでしょう。それは風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。心が揺れますから、混乱が生じてきます。
- しかし、「疑わずに、信じて願いなさい」ありますから、ただやみくもに、神様に、「お願いします」、「お願いします」、と言っているわけではありません。ここでヤコブが強調していることは「へりくだりなさい」ということです。少しも疑わないで願うとは、どういことでしょうか。それは、素直な信仰（信頼）であると思います。 **マルコ福音書 11:23** まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、『動いて、海にはいれ。』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりにになると信じるなら、そのとおりになります。

11:24 だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。

- 「少しも疑わずに、信じて願いなさい。」ということは、大変難しことですね。なぜなら、自分の誇り、自信というものを捨てなければ、出来ないことだからです。しかし自分の高慢、プライドを捨てて、謙遜の中に置かれた時に、はじめて神に対する信頼（信仰）が与えられるものです。ですから、少しも疑わずに、願うことです。それは疑わない祈りです。神を信頼し祈ることです。
- ヤコブは言いました。疑う人は「二心のある人」です。

1:8 そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。

つまり、信仰の世界と不信仰の世界に、二股かけている人のことです。

詩篇 12:2 人は互いにうそを話し、へつらいのくちびると、二心で話します。

詩篇 119:113 私は二心の者どもを憎みます。しかし、あなたのみおしえを愛します。

- 二心のある人の祈りは、神に聞き届けられません。少しも疑わずに、祈ることです。

2) 試練の時にこそ必要な「上からの知恵」

- 初代教会時代、数多くの試練、苦難、迫害がありました。
少し考えてみてください。キリストの教会が誕生し、まだ間もない時期でした（人間でいえば幼児期でしょう）。これから成長し前進していこうと願っていた時、大きな迫害の手が伸びてきたのでした。
- さまざまな試練が、当時のクリスチャンに及んできました。
その試練下で、ある人には神を疑う気持ちが起こってきたことでしょう。また試練への対処の仕方についても、教会内で意見は分かれたことかと察します。そして混乱も生じてきたことでしょう。
- 皆さん！ この手紙は、そういう中で書かれた書簡なのです。そういう中であるからこそ、ヤコブも「上からの知恵」が与えられていかなければ、乗り越えることは難しかったと思います。信じて、疑うことなく、願う（祈る）ことです。

{例 話}

- ・しばらく前ですが、こんな話しを耳にしました。米国人 George Wahington Gozalz は陸軍将校でした。彼はパナマ運河建設の主任技術者でした。パナマ運河の建設は、容易な事業ではありませんでした。Gozalz は、悪天と地理的条件の悪さに悩まされていました。
- ・そういう彼にとって最大の困難は、本国から聞こえてくる批判の声でした。多くの人々は、このプロジェクトを完成するのは不可能だろうと考えていました。ある時、彼の同僚がこう尋ねました。
「あなたは、いつになったらあの批判家たちに回答するつもりかね」
それに対して、Gozalz はこう答えました。
「その内に」 「その内にとは、いつのことですか」
「運河が完成した時です。」
- ・彼は批判家の声に耳をかさずに、運河の完成を信じつづけたのでした。

- ・皆さん！ 試練の時にこそ「上からの知恵」が必要です。
では、どうすれば「上からの知恵」を得ることが可能でしょうか・・・？

- ① 主の前で、心静めること
 - ② 主を信頼し、みことばを読むこと
 - ③ 「上からの知恵」を願う（祈る）こと
- * これらは信仰生活の基本です。

- ・今日、私たちは「知恵の先にある喜び」として学んできました。
では、なぜ「上から知恵」をいただくことは、喜びなのでしょう。
そこに ⇒ 神の義（主の臨在）が現されるからです。
主が現れてくださるところには、問題解決があります。試練の中でも忍耐をもって祈り、神を少しも疑わず、信じる聖徒に神は祝福を与えてくださるからです。ですから、それは喜びと変えられるのです。
- ・皆さん。いかがでしょうか。私たちは試練に出会った時、どのように受け止めてきたのでしょうか？ 自問自答してみてください。

ま と め

- ・主 題：「知恵の先にある喜び」
—主のご臨在—

- ・今日も、私たちは主から幸いなみことばをいただきました。
私たちにとって大切なことは、「知恵の先にある喜び」を経験することです。
では、どうすれば「上からの知恵」を受ける聖徒となることができるのでしょうか。3点

1. 主の前で、心静めることです
2. 主を信頼し、みことばを読むことです
3. 「上からの知恵」を願う（祈る）ことです

* God bless you!